

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Bulgaria : an ethnological travelogue

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 九祚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004612">https://doi.org/10.15021/00004612</a>

を胴巻きのように巻きつける。かつてはこの胴巻にお金やタバコ、武器、ときには食糧品を入れていた。なお上衣は女性の服とほとんど変らない。男性衣服の縁どりには9本の毛糸を撚り合わせたガイタン Гайтан とよばれる紐を縫いつけていた。他のバルカン諸民族やトルコ人の場合も同じであるという。

6月6日 曇 小雨がときどき降る。  
8時10分のバスで、ティルノボからガブロボへ移動。ホテル・バルカンに宿泊。ガブロボはヤントラ川をはさんだ山間の細長い町であった。着いてすぐ郊外に建てられた手工業の博物館を訪れた。これは「民族学的公園・博物館「エトル」」 Етнографски парк-музей “ЕТЪР” と称されている独特の施設で、全部で62種の手工業がそれぞれ別の建物に納められ、実際に職人が仕事をしている状態で展示されている。1974年ブルガリア最高の国家賞であるディミトロフ賞を受賞したラザル・ドンコフ Лазар Донков 博士の設計と努力で実現したものである。この日は日曜日であったが、68歳のドンコフ博士は自ら私たちを案内して下さった。

博士は私に、もう何年も日曜日に休んだことがないと語っていた。公園・博物館の各職場の職人たちはほとんどが定年をすぎた年金生活者で、彼らの製品は売店で現金で販売されていた。老人労働のこうした利用法については、当然のことながら賛否両論があり、その中でこれだけの事業を完成させることは容易なことではないと思われた。

ガブロボは昔から手工業の盛んなところで、この公園・博物館もその伝統や施設を生かしたものであった。建物の屋根は、ほとんどが付近で産する長石の薄板であった。ナイフ製造、天然の水力を利用した研ぎ屋、洗濯屋、木工場、鍛冶屋、皮革屋、織物工場、馬車製造、靴屋、菓子屋、陶器工場、板金工場、装身具の製造などで、なかには19世紀風のコーヒー店もあって、見学者たちはそこで実際にコーヒーを飲むことができた。

ЕТЪР が1963年ドンコフ博士によって創設、維持されてきたことは、すでに記した通りである。園内の橋のたもとの石柱には、独立運動時代の志士ラコフスキ Г. С. Раковски のつぎの句が刻まれ

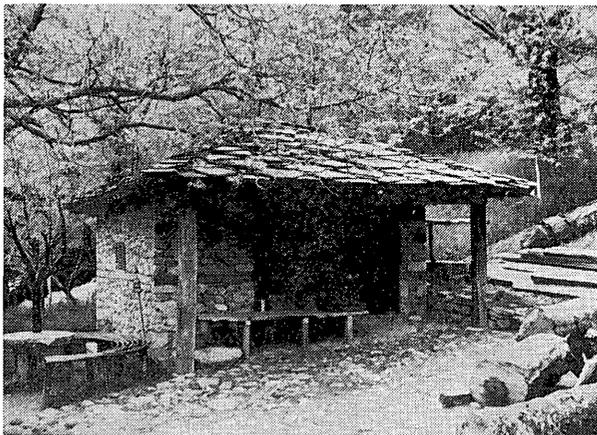


写真17 「エトル」の水車小屋。  
屋根は砂岩の板

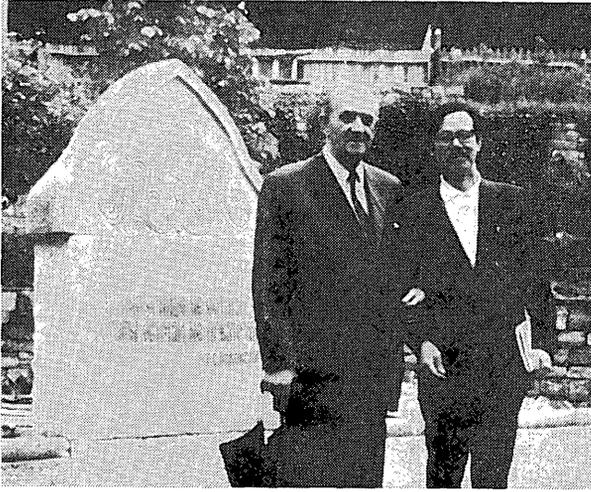


写真18 ラコフスキの句碑の前で。左 ドンコフ博士、右 筆者

であった。

**Башино огнище не оставай—**

**Стари обичаи не презирай!**

(父なる炉を捨て去るな、古い慣習をさげすむなノ)

私たちは外国からの遠来の客として、同じく園内につくられた民家風のレストランでたいへんおいしいブルガリア料理の昼食までご馳走になった。このときドンコフ博士は、日本の雑誌のためにこの博物館の概要を書いた原稿を送ろうと言われた。

ところが、それから約半年して私が日本に帰国したとき、1976年11月1日付でドンコフ博士の夫人マリア Мария Донковаさんから、ドンコフ博士が9月に亡くなられたとの死亡通知が届いていた。原稿も別便で到着したが、ブルガリア語であった。ドンコフ氏は私たちと会った3カ月後に死亡されたのである。ここにつつしんでドンコフ博士の冥福を祈るものである。

ガブロボから山ひとつ越えたところにあるトリャウナ市を訪れた。ここは古来

木工で知られた町で、教会の祭壇の両側の壁面や柱などにほどこされた木彫、住宅の天井装飾はとくに有名である。またこの町には「ブルガリア・ルネッサンス」期の住宅が街区のままで現存している点でも珍しい。いくつかの通りの交差点に、四方からよく見えるように木造の古い鐘楼が立っていた。1190年創建というアルハンゲル・ミハイル教会の3層のイコノスタス（祭壇の両側壁面の聖画または浮彫）はすばらしかった。1807年建設の商人ダスカロフ Даскалов の家も博物館として保存されていたが、内部の壁や天井の木彫、とくに天井中央につけられた大きな太陽の形の彫刻は見事であった。

木彫の材料は、以前はクルミ、ポダイジュであったが、今は他の木も使っている。そもそもトリャウナ流の木彫はヒレンダルスキ Хирендарски に学んだ17世紀の工匠ウィタン Витан に由来すると言われる。

なお、この町には14歳で入学し4年間学ぶことになっている木彫専門の学校があった。1920年創立、生徒総数は400人。



写真19 トリャウナの街角

ただし女子は稀であるとのこと。この種の学校はソフィア、ルセ、プロウディフにもあるとのことだった。

ガブロボから東方16キロの盆地にあるボジェンツィ *Боженцы* 村を訪れた。総数50戸ほどであるが、村全体が住民の居住しているままで建築史的な国立公園に指定されていた。この村の創立者はティルノボがオスマン・トルコに占領されたとき、敵手をのがれて山中に逃げたベジェナという女性（9人の子どもがいた）であると、伝説は伝えている。この村の住民は代々男は鍛冶屋、女は織物で知られ、その製品を遠くロシア、ルーマニア、オーストリアまで運んで売りさばいた。また皮革商人も多く、彼らは稼いだ金で見事な住宅を建てた。今ではほとんどが150年からの歴史をもっている。果樹に包まれた緑の中に、それぞれ個性的な住宅が斜面に白壁を見せており、たしかに文化財に指定されるだけのことはあると思われた。つくりはいずれも優劣を分ちにくく、歩いていてもつぎつぎに目うつりするほどであった。基礎から1階の高

さまでは、煉瓦大のものからその3-4倍くらいの大きさの自然石を積みあげていた。今では、村の若い者は多く都会へ出ているとのこと。玄関口のところに古株のブドウを植えている家も多かった。



写真20 ボジェンツィ村の民家

ここで若干の時間があつたので、250年前に建てられたというペトコワ **Мария Петкова** さん(62歳)の家を訪れ、中を見せてもらった。容器には陶器のほか、銅器、木器も多かった。ロシア式の壁ペーチカはなかった。今ではごく少なくなった手織の布地は、ほころびをついで大切に使用していた。私はここでペトコワさんにこの山村でのかつての食事のことをきいてみた。通訳には同行のネディさんをわずらわせた。

### 〔ボジェンツェ村の食事〕

朝はふつうポパラ **Попара** というものを食べた。ポパラにはいくつかのバリエーションがあつた。

(1) 新鮮な牛乳にパンをちぎって入れたもの。この中にわずかの塩を加える。あるいは砂糖、蜂蜜で味つけをすることもある。パンは小麦粉、大麦粉、トウモロコシ粉を単独または混合で用いた。

(2) ペトコワさんの若い頃には、秋にキャベツを塩水に漬け、1-2カ月おくと酢っぱい汁ができる。これはゼレワ・**Чорба** **Зелева Чорба** とよばれる。このゼレワ・**Чорба**を煮てこの中に水とときの麦粉を入れて煮こみ、この中にパンをちぎって入れて食べた。

ゼレワ・**Чорба**にヒツジの肉、米その他を加えて煮こみ、水とときの麦粉を入れ、煮て塩で味つけする。これにパンをちぎって入れて食べた。これは昼食にもなるし、お祭りのときの食物にもなった。しかし肉や米は一般民衆にとっては貴重品であつた。

(3) ①クルミをいため、水を加えて熱する。②粉に水と塩を加えてこね、直径1 cm ほどの団子をつくり、この団子に

とおしにかけた粉をまぶして①の中に入れて10-15分煮る。塩で味つける。③どんぶりの中にパンをちぎって入れ、④をそそぎかけて食べる。

昼食にはカルトフェナ・ヤフニヤ **Картофена яхния** というものを食べた。これはつぎのようにつくつた。①ヒマワリ油で玉ネギの薄切りをいため、ブタの脂肪 **Мас** を加えて玉ネギが黄いろになるまでいためる。②ジャガイモ、パセリ、水を①に加えて煮こんで、塩で味つけして仕上げる。これにトマト、トウガラシを加えることもある。

トウモロコシの粉をカユにして食べることも多い。

ほかにインゲン豆やフジマメを用いた豆料理もあつた。玉ネギの薄切りをバターでいため、色がついてきたら、水と豆を加えて長時間煮こむ。塩とコショウで味つけをし、皿にもってパセリ **Магданоз** をかけて食べる。これは水加減しだいでスープにも主食にもなった。

夕食には、昼食の残りものを食べる。

漬物はふつう樽に漬ける。日本のように、まるかんなを用いて作った桶や樽がブルガリアではよく利用されていた。青いトマト、青いトウガラシ、ニンジンも樽に入れて塩と水を加え、約1カ月おくとでき上る。これをサラダのようにして食べる。キャベツもこのようにして漬ける。漬物の汁は捨てないで利用する。

祭日には必ずと言ってよいくらい、パニツァ **Баница** というものをつくつた。これはロシアのピロシキによく似たものである。①粉に水を加えて、よくこね、適当な大きさに分けてめん棒で薄くのばす。②白チーズ、酸乳、卵をまぜたものを①の中に入れてつつみ、これを火

床で焼く。これにバターをつけて食べる。シュチル・штир という葉をみじんにきざんだものを④の中に入れることもあった。シレネ・Сирене(ロシア語の Брынза)とよばれる酸乳はとくに愛用された。

祭日のご馳走としてはサロミ Сароми というものもあった。④植物油で玉ネギの薄切りをいためる。この中にひき肉、米、トウガラシ、塩、黒こしょうを加えてさらにいためる。ブドウの若葉に④をくるんで、フライパンに平らにおき、水をひたひたに入れて1-1.5時間とろ火で煮こむ。皿をもって、乳酸をかけて食べる。

ブドウの葉の保存方法はつぎの通り。新鮮な葉を1枚ごとに塩をふりかけて重ね、紙にくるんで保存する。使用するときにはこれに熱湯をかける。春の新鮮なブドウの葉は、湯をかけてそのまま食べることもある。

肉は焼串に刺して食べることも多い。全体としてブルガリアの料理には脂が多く、それをトウガラシで赤くしているのが特徴である。ブルガリア人があまりにトウガラシを愛用するので、最近政府は

国民の健康をうれえて、都市のレストランにトウガラシを出すことを禁じている。こうした辛い味つけは、ブルガリア人が他のスラブ諸族とちがう点であり、同時にバルカン諸民族の共通した特徴とされている。

肉の保存方法にはいろいろあった。塩をかけて乾燥させたり (Пастърма という)、煮あげてヒツジの胃袋に入れたりした。家庭でいろいろなソーセージ Луканка がつくられた。羊乳、牛乳などはたいてい酸化させて食べた。

飲物としてはコーヒー、果汁、バターを採取した残りの酸乳 Айран、キビ粉でつくったアルコール性の飲物 Боза などが用いられる。強い酒としては、ブドウやアンズからつくった蒸溜酒 Ракия がある。私はトロヤンの修道院で、修道僧が40種の薬草を通して濾過したラキヤを1びん8レフで買った。代金は修道院の改築の費用にあてるといふ。

一般にブルガリアの各地で薬草が珍重され、バザールなどでもさまざまな乾燥薬草が売られていた。野山で薬草を採集している人々にもよく出会った。ネディ



写真21 トリャウナのバザールの薬草屋

さんの家でも、ご主人の父親はたいへんな薬草愛好家で、老人のありあまる余暇をすべて薬草採りとその調合についやしているという。薬草と言えるかどうかかわからないが、ネディさんの家族はみんなクルミの青い実（熟す前の）とノバラの実をまぜて煎じたものを飲んでいる。ポダイジュの花でつくった「茶」はソフィアの薬局でも売られていた。ネディさんのご主人はこれだけを飲んでいる。私も1袋みやげにもらい、帰国して飲んでみた。とくに就寝前にのむとよく眠れるような気がした。効能はたしかにあると思われる。

6月5日の昼頃、ティルノボからバスでアルバナシ **Арбанаси** 村へ古い建築物を見に出かけた。このあたりの建築はアルバナシ型として、全国的にも特徴をもっている。村は明るい丘陵上にあり、家々は石垣でかこまれていた。全部で120戸くらいあるが、農業をしているのは5軒だけで、あとはみなティルノボへ通勤しているサラリーマンという。しかし庭先にはブドウ、モモなどの果樹、ジャガイモ畑があり、ニワトリがのどかに餌をつついていた。

ここではまずコスタンツァリエフ **Ко-станцалиев** という17世紀初めの民家を見学した。外側からはまるで城のようであったが、中は広々とした2階建てで、階段は枕木のような角材でできていた。部屋の入口はいずれもアーチ型になっていて、扉だけは四角形であった。応接間、客間、居間、炊事場などに分れており、床にじゅうたんを敷いて人々が横になるれようになっていた。この点は中央アジアや中近東と同じであった。1階は家畜小屋や物置として使用される。便所の穴が三角

形になっているのが面白かった。広い庭にはサクランボが多く、おりしも食べ頃で、好きなだけ自由に枝からもいで食べることができた。

アルバナシ村ではまた聖アルハンゲル教会（17世紀）を訪れた。質素な建物で、入口に近い方が女性用、祭壇に近い方が男性用の部屋になっており、天井はすべて聖画でおおわれていた。壁は煉瓦積み。木材は地はだが見えるように利用されており、日本建築が連想された。

6月8日 ときどき雨 今日にはガプロボからトロヤンへ移る日。日本の中国山脈のような山の中にあるガプロボには、朝から深い霧がたれこめていた。ブルガリアもまた、今年は例年になく雨の多い年という。2泊分のホテル代18.72レフ。7時20分ホテルを出て、重いトランクを下げてバスセンターへ。10時半トロヤン着。町はずれ、300段くらいの石段を上った上のホテルに到着。

まず博物館を見学。トラキア、ローマ、古スラブなどの時代の考古学的遺物もあったが、なんとと言っても19世紀以後の陶器と木彫のコレクションがすばらしかった。揺籃に男女の別のあるのも面白かった。揺籃をつり下げる木の枠組の左右両端に鳥形の彫刻があり、その鳥が外を向いているのは男の子、内側を向いているのは女の子であるという。

トロヤンは、私自身これまで寡聞にして知らなかったが、陶器で世界的に有名である。この地の粘土が焼物に適し、しかも薪と水に恵まれていることが原因とされている。

6月9日はまず市内の陶器工場を見学した。従業員600人、年産額300万レフ。**Троянска керамика** とよばれる独自の



写真22 祭壇壁面（イコノスタス）の装飾の一部。19世紀の木彫。トロヤン博物館

うわぐすりの塗り方を開発している。焼物は今は電気炉を利用し、1000°Cの窯に2度通している。市内には陶器の工業学校もある。

午後は郊外6kmの山中にあるトロヤン修道院を訪れた。リラ、バチコボとならぶブルガリアの3大修道院の1つで、17世紀初頭創建、19世紀に現状に形づくられた。教会は1835-31年に建設、ブルガリア・ルネッサンス期の著名な画家ゾグラフ Захария Зограф の手になる聖画が内外の壁面をおおっていた。祭壇の中央部、3段目に高さ1.5m以上と思われる大十字架が立っていた。修道院僧の個室は木造3階建て、テラスのような広い廊下で結ばれていた。その一部には、19世紀後半のブルガリア独立運動時代、革命家ワシル・レフスキがトルコ官憲の手をのがれてここでかくまわれたということで、この出来事にちなむ遺品や写真が展示されていた。もちろん修道院長がかくまったのである。この修道院には現在5人の修道僧がいたが、建物の改築のために、酒やろうそくなどを売って資金をつくっていた。

トロヤン市内には約40人にのぼる焼物やチェカンカ（銅板叩出し）の職人が自家営業をしていた。これはみなマスケルという称号をもっており、質の高い民芸



写真23 トロヤン修道院の一部



写真24 トロヤン修道院内の教会入口。手前の人はネディさん

品をつくって、これを売りさばく特別組織を通じて流していた。私たちはバエフ Баев という陶工(63歳)、トテフ Тотев という板金工(77歳)の家を訪れ、その

職場と作品を見せていただいた。

6月10日 早朝のバスでトロヤンを出発、ヤブラニツァ、ボテグラドを經由、ウィチャ Вития 峠を越えてソフィアに帰着した。午前11時40分。ボテグラードは現在のブルガリア最高の指導者トドル・ジフコフの出身地であるからか、道路も住宅もずば抜けてよく整備されていた。政治家が自分の出身地に力を入れるのはいずれの国でも同じらしい。



写真25 トロヤンの自家営業の陶工バエフ氏

私たちが旅行したのは、もちろんブルガリアの一部にすぎないが、それでもこの国の自然が変化に富み、しかもたいへん豊かであることを痛感した。恵まれた国土でありながら、まだ人口密度も高いとは言えず、うらやましいほど可能性に富むと思われた。人々は全体として控え目でしかも明るく、親切であった。伝統を大切にしながらそれにとらわれず、店にならぶ生活必需品にしても、色彩や形などにブルガリア人のすぐれた美的感覚がよく反映していると思われた。街をゆく人々の衣服のデザインや色彩、みやげ

品などにも、このことはよく現われていた。

またソフィアやプロウディフ、ワルナなどの都会ではロシア語だけでなく、英語、ドイツ語、フランス語の話せる人も多かった。とくにドイツ語の普及しているのには驚いた。ロシア語は4年生から、英語とドイツ語は選択で7年生から、いずれも10年生まで必修であった。ほかにソフィアには、7年終了で入学するロシア語、英語、ドイツ語の専門学校があり、入学試験は難しいとのことだった。

以上、ここに紹介したのはごく表面的なことがらにすぎない。今後、東ヨーロッパやバルカンの他の諸民族との比較において、さらにつこんで研究される必要がある。ブルガリアは民族学的にじつに興味深い国の1つである。この一文がそのための刺戟になれば幸いである。

最後に、もう一度ブルガリアの対外文化協会のキсьов、 Kostova、ソフィア博物館の Пунтев、Шипчанова その他多くの人々に心から感謝するものである。私も今後再度、三度とブルガリアを訪問することができ、またブルガリアからも

専門家にきてもらえるようになることを念願してやまない。なお、ブルガリアから、依頼した民族学的資料がそろったという連絡はまだないが、いずれ近いうちにくるものと期待している。

## 文 献

- АН СССР ИНСТИТУТ ЭТНОГРАФИИ  
1964 *Народы Зарубежной Европы I*, Москва.
- БАЛАБАНОВ, Б.  
1959 *България, София*.
- БАН ИНСТИТУТ ФРАКОЛОГИИ  
1975 *Фрако-скифские культурные связи, София*.
- ВАКАРЕЛСКИ, Х.  
1974 *Этнография на България, София*.
- ВОДОВОЗОВ, Е. Н.  
1881 *Жизнь Европейских народов, том I, СПБ*.
- КОЛЕВА, Е.  
1970 *Этнографско изследване на Розовата Култура и Розопроизводството в гр. клисура и някои съседни села, Пловдив*.
- СТАМОВ, С. А.  
1972 *Архитектурное наследство Болгарии, София*.
- ТОДОРОВ, Н.  
1975 *Kurze Bulgarische Geschichte, Sofia*.